

# 私の肺がん克服記

国際弁護士 小島 秀樹

消化器がんの専門医として最先端医療の現場で長年活躍され、現在では全人的医療という概念のもと新しい医療のカタチを追求する、本誌でもおなじみの島村トータルケアクリニック院長の島村善行先生。

島村先生がマクロビオティックを強く意識するようになるきっかけになったのは、勉強会仲間の知り合いであった小島氏から相談を持ちかけられたことによる。島村先生は心記して、早期の手術を勧めた。

小島氏は1998年に都内の病院で肺がんと診断された後、現代医療のがん治療法に疑問を感じ、手探りの中、マクロビオティックでがんを克服した貴重な経験をもつていらっしゃいます。この度、小島氏より体験記をご寄稿をいただくこととなりました。

## はじめに

私の肺がんをマクロビオティックという食養法で克服した話を書いて欲しいという依頼を受けた。15年半以上経ったが、今も私は元気に仕事をしている。その間、肺がんの医学的治療は一切受けていない。

しかし、最初の7年間は年1回、CTスキャンによる検査を受け続

けた。その後8年間は、検査さえ受けていない。役所から健康診断の通知が来る年齢になったが、全てゴミ箱に捨てている。

かつて、手記をまとめたり、人前でスピーチしたりと、経験を発表したことはある。しかし、過去5年以上は書いていない。今の心境を含めて、自分の到達した気分をまとめる機会としてみたい。

## 診断の頃

1997年11月、CTスキャン検査で上肺部外側に直径3.2cmの正常ではない影を認めた。都心の著名な病院施設であった。主治医はがんであることを断言した。半信半疑の私は、医師の治療の勧めに躊躇した。第2期のステージにあり、手術によって除去できるのであるだけ早く行おうべきだ、とのことであった。

自覚症状はなかった。家内の勧めもあり、確定診断を得るべく、同じ病院のレントゲン科による「CTガイド

下針生検」を受けることにした。翌年1月に検査入院を予約した。2カ月以上もの間、そもそもCTスキャンによる診断をそのまま受け容れるべきかを躊躇したため、検査が遅くなった。

2人の医師の一人(O氏)は断言

したが、他の大学病院の医師(T氏)は断言はしなかった。しかし、その可能性は高いという趣旨の評価であり、2人の見解は大筋一致していた。

CTスキャンによる画像診断はどのように「推定」であるに過ぎない。私自身が納得しないまま放置するかと言うと、そうはいかないだろうと考えた。ならば、一旦推定黒判定が出た以上、確定診断を求めざるを得ないかと考え、妻の意見を受け容れることにした。

検査の結果は、確定黒であった。50歳の時であった。右胸上部に直接針を手で突き刺し、CT撮影した位置をリアルタイムで確認しながら、針の先に引っかけた細胞組織を引き抜くという乱暴な方法であった。主治医のO氏は同じ病院での手術を勧めてくれ、予約の日程まで決めた。その後、手術用の自己血の用意、仕事の段取りなどを準備しつつ、何となく医師の指示に疑念を感じながらの日々であった。

日本医大の丸山千里博士の丸山ワクチンを自ら調べ、ワクチン注射を受けてみることにした。O医師は、「これは昔から随分やりましたが、あまり効果はなかったのですよね。でも注射はしてあげますよ」と言って即実行してくれた。週3日通い射ち続けた。